

防衛大学校本科第24期学生及び理工学研究科第17期学生 卒業式における学校長式辞（昭和55年3月23日）

本日、防衛大学校本科第24期学生451名及び理工学研究科第17期学生73名の卒業式典を挙行いたしますに当たり、國務御多端の折にもかかわらず、御臨席を賜りました大平内閣総理大臣^{注(1)}、細田防衛庁長官^{注(2)}をはじめ、国会議員ほか内外多数の御来賓各位に対し、心から厚くお礼を申し上げます。

また卒業に至るまでの間、歴代の防衛関係機関の幹部各位、官民の諸機関、更には有志の皆様方、並びに在日米軍、各国大使館付武官等よりいただきました御指導、御激励に対し、併せて厚くお礼申し上げるものであります。また本校において、学術教育の任に当たられました教授・助教授・講師・助手をはじめ、日夜をわかたず訓育補導に挺身され、あるいは陰になり日陽になって校務に精励せられた自衛官及び職員の各位に対しましても、学校長としてこの際、深甚なる感謝と敬意を表する次第であります。更にはまた、遠路はるばる御参列賜りました御父兄をはじめ、卒業生の御家族に対しましても、深く感謝申し上げますとともに、御子弟の成業を心から祝い申し上げる次第であります。

さて本科卒業生諸君、小原台4年の貴重な歳月は、諸君の脳裏に終生忘れ得ぬ数々の思い出を刻み込んだことと存じます。この尊い思い出を未来への希望に託して、一般幹部候補生として、近く21世紀を迎える日本の国運を担う若人の一人として、勇躍その任務に邁進していただくことを心から期待するものであります。

ここに、巣立ち行く諸君にお別れの言葉として、二、三申し上げてみたいと存じます。



第4代学校長 土田 國保

注(1) 大平正芳

注(2) 細田吉蔵

まず第一に、諸君の人生修行、人間修行は、まさにこれからだということでもあります。諸君は、防大4年間「廉恥・真勇・礼節」をモットーとする学生綱領に従って、自らを律して来られたのでありますが、およそ「^{まこと}真実の人生」というのは、名利栄達のごときはまず縁薄きものと観じて、己れの生活内容と行動を窮極的には自己の良心をもって律することによって、はじめて本物といえるでありましょう。事に臨んで発揮すべき縦横の智略も、千万人といえども吾^{われ}往かんとする真の勇氣も、人情の機微に徹した愛の心も、いずれもかかって己が私心を去り、己れが内心の清潔を保つことによってのみ、ほとぼしり出ずるものであります。

起伏多き人生の行く手に思いがけず襲い来る数々の試練、それに伴う挫折感と焦燥、甘えと誘惑、自己との妥協、これら一切を乗り越えて行くことは決して簡単なものではありません。およそ人間は弱くしておろかなるものであります。なるがゆえに、諸君、どうか自分自らを大切にしてください。そして常に素朴な気持を失わず、広く心を開いて、よき師、よき先達、よき友を選び捜し当て、また先哲の書に学び、己れが人間性の奥行を深めて行っていただきたい。将来の諸君の任務である多数の部下の統率ということは、知識や技術もさることながら、^{ひっきょう}畢竟自らの人間修行如何にかかっているということを、常に忘れないでいただきたいと存するのであります。

第二に、諸君の勉強はまたまさにこれからだということでもあります。諸君はこの4年間、学問の世界とは何であるかを、あるいは少なくとも学問の世界の一端ぐらいを、のぞいて見る事が出来たと思います。そして近くは卒業研究などを通じて、今更のごとく自らの学力不足を身にしみて感ぜられたのではないのでしょうか。まさに「少年老い易く学成り難し」であります。今後、いかなるコースを^{たど}辿られるにせよ、学問に対する尊敬の念を失わず、機会あるごとに研学の門に入り、あるいは寸暇を割いて自己研鑽に励んでいただきたいのであります。「実力」ということの尊さと恐しさは、勉強を続けている者によってのみ体験され、進歩向上の星は、常に己が未熟を反省しつつ、黙々として励み行く者の上にもみ輝くものであります。

第三に、諸君の心身の鍛練は、またまさにこれからだということでもあります。鍛練は、続けなければ急速に退化し、形骸化し、過去の肩書きとなってしまうものであります。防大4年間、自らの肉体と精神の限界に挑み、そしてそれを乗り越えて来たこの貴重な資産と実績に、今後更に磨きをかけられて、尉官のシンボルとも称すべき、「意気と情熱」を

縦横に発揚し、いかなる状況下においても、最後まで粘り抜ける不屈の気力体力を維持増進していただきたいと存するのであります。

次に、理工学研究科卒業生諸君に対し、一言申し述べます。貴重な2年の歳月、諸君は本科生あるいは一般大学生としての学業の上に更に磨きをかけられたわけではありますが、将来の我が国防衛任務の達成のためには、世界先進各国に比して遅れがちな我が国の技術開発力を、いかに充実強化するかということが重大な課題となっている現在、どうか今後とも更に研鑽に努められ、それぞれの新任務に挺身せられるとともに、自衛隊の科学技術分野の発展向上に尽力されんことを切望するものであります。

さて申すまでもなく、祖国日本は、あくまで日本国民が護り抜くべきものであります。この祖国防衛のため、志を立て、他にさきがけて挺身せられんとする卒業生諸君、諸君の一人一人こそまさに国の宝と申さねばなりません。ここに改めて深甚なる敬意を表しますとともに、一層の自重を祈ってやまないものであります。

最後に、少数ながら本校卒業後、他の人生コースを歩もうとする諸君に申し上げます。諸君は、あるいは健康上、あるいは家庭の事情等から、将来民間その他で活動する途を選ばれたのであります。自衛隊幹部養成を目的とする本校として、諸君がその素志を遂げられぬのは真に残念でありますけれども、小原台の4年間にわたる青春の思い出は、諸君にとってまた永久に忘れることはないであります。将来いかなる途を歩まれるにしても、この貴重な体験を踏まえ、ともに手を携えて我が国の安全と発展、国民生活の幸福のために進もうではありませんか。

最後に重ねて卒業生諸君の御健康と今後の御健闘を心から祈念いたし、式辞といたします。